

## 第6回 Rhetoric in Europe and America(2026年2月13日開催)

### 第1セッション William Shakespeare "JULIUS CAESAR"

- ・まず、シェイクスピアの戯曲を原文で読む、かつ、ただ読むのではなく、客観的に考えながら読むことがすごく貴重な体験になった。日本語訳ではなく原文の英語だからこそ、その”筆者の表現”に関して議論を進めていけるのがよかった。この文章を通じて群集心理やスピーチ時の印象操作について深く考えたが、一番考えさせられたのがブルータスのスピーチについてで、シェイクスピアが描こうとしたブルータス像を、その順番やスピーチ時の群集に「いいえ」と言わせないような質問の投げかけ、正直かつ理論的なスピーチ内容といったように、しゃべっている量は少ないのにブルータス像をきれいに描き、観客に同情させるのがうまい。この見方楽しい。
- ・とにかくブルータスに感情移入してしまいました。シェイクスピアの読者の心を引き込む力をひしひしと感じるテキストで、とてもおもしろかったです。理性的に民衆に訴えるブルータスと、感情に訴えかけるアントーニウスという対比構造がおもしろかったし、これは現代社会に通じるところがあるなと思って、アントーニウスの演説がまさにポピュリズムだなと感じて、少し怖くなりました。アントーニウスがわざわざ説教壇から下りることで民衆と同じ視点に立ち、感情を動かしているのがうまいなと思いました。私は断然ブルータス派ですが、その場にいたらアントーニウスの演説のうまさに圧倒されてアントーニウスに賛成してしまいそうだなと思って、ちゃんと自分の芯を持って生きたいなと思いました。
- ・演劇なのでたいへん面白く、読みやすかったように感じました。自分で読んで考察したときは、シーザーの遺体やマントが民衆に見せられたシーンに注目し、「痛み」を通じた民衆の一体化について考えてみました。自分としては他に考察できそうなところを見つけられずなかなか苦しんだのですが、対話に参加してみたところ、演劇での動作やブルータスとアントーニウスのセリフの似通った部分の語順など自分が見落としていた考察ポイントの多さに気づかされました。また、演劇的な視点から観る者の心理について先生が教えてくださり、非常に面白い観点だと思いました。
- ・今まで読んだ文章の中で一番面白かったです。今までで一番自分の考えがまとまったし、楽しかったです。細かい表現（ブルータスの「Be patient until I finish, Believe me～」など、命令形が多いため、流されやすい市民の性質を理解しているだろうということや、ブルータスは「Romans, country men, and friends」の順番で呼びかけているのに対し、アントーニウスは「Friends, Romans, country men」の順番になっている、ということなど）に気付く人が多くて、私は全く気付かなかったので感激しました。「ブルータスは理性、アントーニウスは感情」のように一見思えるけれども、実際はブルータスよりもアントーニウスは策士でいろいろ計算しているかも、ということが話し合いでわかって、本当に面白かったです。

### 第2セッション Abraham Lincoln "The Gettysburg Address"

- ・演説がされた時代だけでなく過去や未来にもつながる解釈に対話で気づかされ、とても面白かった。また、広く一般的なイメージを使って、さまざまな背景がある人々をまとめようとしたという意見が印象に残っている。シェイクスピアとの関わりを少しでも見つけることができたのも、冒頭で示されていたリンカーンがシェイクスピアの文を暗唱していたということの答え合わせみたいに感じられた。liberty と freedom の違いについての議論は、自分では気づくことができなかったのも、聞いていて楽しかったし、新たな発見になったと思う。
- ・リスニングだけで、本当に当時の人はこのスピーチを受けとめられたのだろうか、今でも疑うくらい文法が難しかった。ただ、スピーチを通してリンカーンが伝えたい方針や重要キーワードを一旦押さえてから全体をながめると、非常に洗練された文章なんだなと感銘を受けた。僕がそうなのだが、スピーチをする直前に見た、聞いた、思い出した（自分が言った）言葉やフレーズは、話す内容をどう伝えるかに思った以上に影響を及ぼしているから、このゲティスバーグの演説の前にリンカーンが話した言葉、過ごした友人・経験したことを深

掘ってみると「その人の言葉」としてより重みを感じられるかもしれない。また、今日初めて原文の大切さ（というより、日本語訳の過不足さ、もどかしさ）を感じられたのはとてもよい経験だった。これから、もっといろんな英語の名著名演説に触れてみたいと思う。

- ・第1パラグラフで“equal”というキーワードを提示し、アメリカ独立宣言を踏まえているという考えを聞いてはっとした。また、戦争ではなく、“civil war=内戦”とリンカーンが表現しているのはなぜかという問いが非常に興味深く、リンカーンは「人民の人民による人民のための政府」による国家を樹立することが内戦の先にみずえた目的なのではという見方を手に入れた。最初にアメリカ独立宣言を想起させ、2段落目でゲティスバーグ、すなわち戦場について考えさせる（いわゆる「死者系」）、最終段落で壮大なスケールで話し、“can not”のくり返しや“that”の連続、“the government of the people, by the people, for the people”といった語感の良さにより民衆に演説をしみ込ませ、内戦の目的を3分にしてすり替えるといったレトリックの恐ろしさも実感した。
- ・リンカーンが独立宣言を持ち出した理由には、暫定憲法を制定して“独立して”しまった南部との共通点や両者の原点を強調するためということが挙げられるとモデレーターの本曾先生が話されて、今まで何か違和感を感じていた部分が解消された。政治的な背景が、リンカーンに多大な影響を与えたことを知って、これからも熱心に世界史を勉強しようと思っただけでなく、また対話では触れられなかったが、“the last full measure of devotion”が戦死を意味するシェイクスピア的なレトリックで美しいと改めて感じた。ゲティスバーグ演説の、「死」から未来へと歩み出すという趣旨がイザヤ書にもみられ、キリスト教の世界では「死」をまず始点とするのが主流だと感じ、宗教的な面白さを認識した。この演説は、現代アメリカにも影響を与えていると思うので、さらに考えていきたい。